

# REIWA 詩人パーフェクト File

## 第5回 元澤一樹

渡辺八畳

起きて半畳寝て一畳、渡辺八畳ですどうもどうも。

どの業界も一定の人が同じ立ち位置に居続けるということはなく、常に新人が下から突き上げてきます。これは現代詩とて例外ではないです。

とはいえ、詩の業界が抱えている問題の一つとして新規参入のしにくさがあります。令和へと元号が変わった現在も新人は現れ続けており、その中には注目するに値する方もいらっしゃるものの、彼らを紹介するとして詩誌はあまりにもスペースが無く、そして反応が遅い！

そういうわけでして、2018 年度『詩と思想』現代詩の新鋭に選ばれ、令和元年に私家版で詩集を出した、まさに「令和詩人」である渡辺八畳自身が、これから台頭してくるであろうホープを独断と偏見で紹介していこうというのが、本企画の趣旨でございます。しばしお付き合いいただけたらありがたいことです。

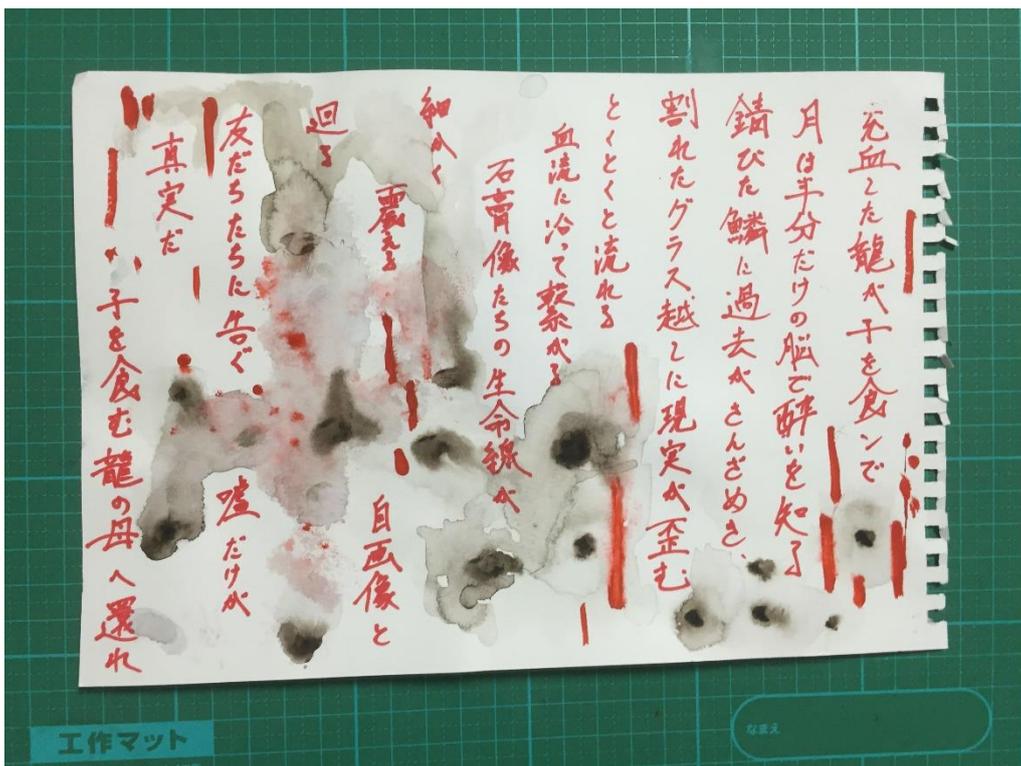
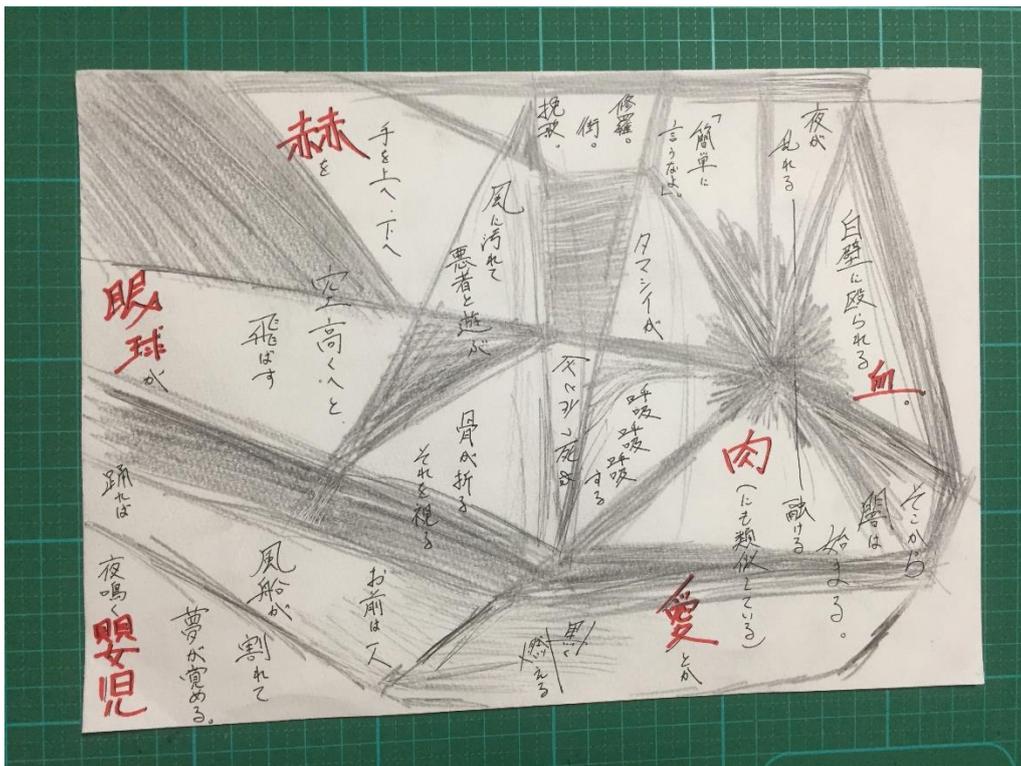
～ ～ ～ ～ ～

今回は元澤一樹さんです。1996 年生まれで第 10 回琉球大学びぶりお文学賞と第 14 回名桜大懸賞作品コンクール詩部門最優秀賞を受賞した、新進気鋭の詩人です。

遥か沖縄の地で活動している詩人である彼とは前々より Twitter でフォロー・フォロワー関係でしたが、実際に会ったのは今年の 1 月、早稲田の交流スペース「あかね」にて詩と絵の合作ライブ「詩絵両交 第 2 回」を開催した時のことです。同じ沖縄で活動するずんやまずん子氏がポエトリースラムジャパンの決勝戦に出場すべく上京していて、それへの付き添いのタイミングでイベントに参加してくれました。

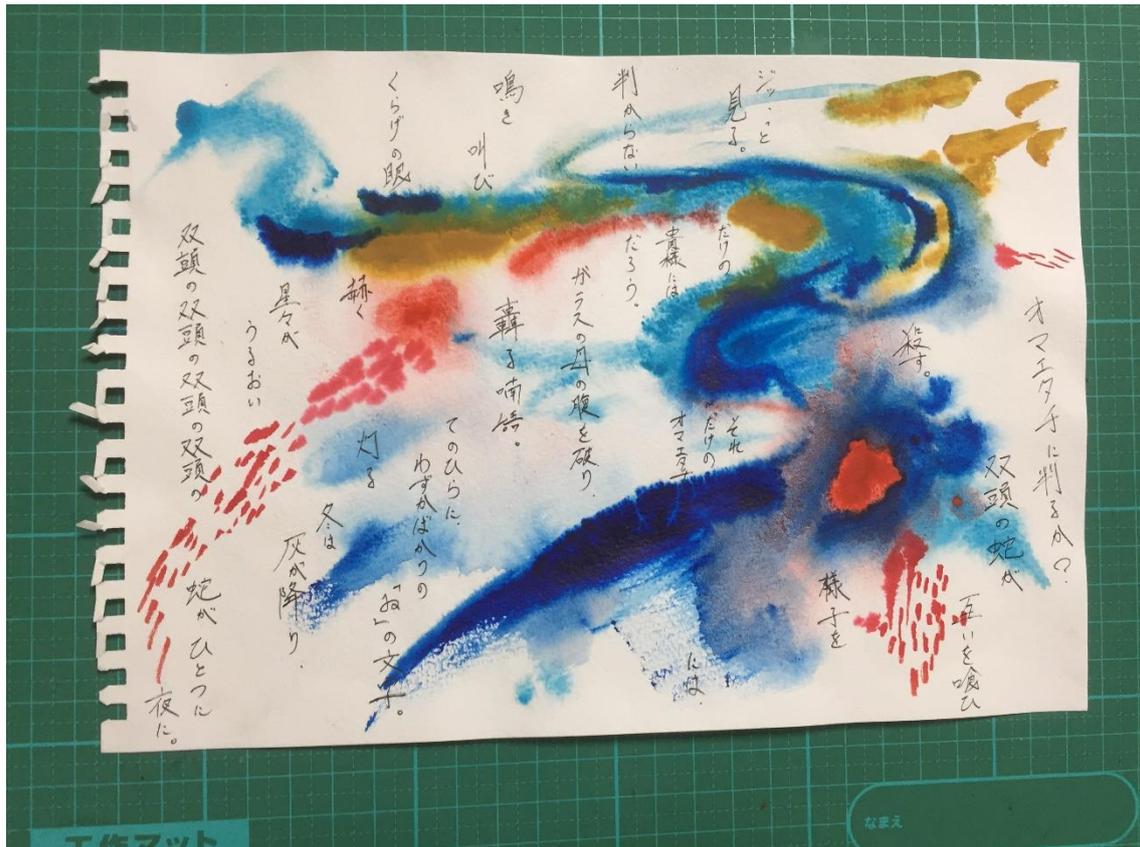
「詩絵両交」は数時間ぶっ通しで詩人と画家が合作し続ける骨太なイベントで、考えるよりとにかく書け&描けなものはスポーツです。そのような状況の中、元澤氏は非常にクオリテ

イーの高い作品を書き続けていたのが印象的でした。



工作マット

なまこ



その元澤氏がイベントより1か月後の今年2月、コールサック社より詩集『マリンスノーの降り積もる部屋で』を刊行しました。この詩集は既に各所で評判を呼んでいるため知っている方も多いでしょう。

先に提示した画像のような「白壁に殴られる血。そこから闇は始まる。夜が乱れる——融ける」「錆びた鱗に過去がさんざめき、割れたグラス越しに現実が歪む」といった詩が私の中での元澤氏のイメージであったため、『マリンスノー』についてもそういった作品が収録されているだろうと思っていました。そしたらね、いや、ぜんぜんそうじゃないのよ。芸達者だわこの方は。

たとえば表題作である「マリンスノーの降り積もる部屋で」は

流星が燃え尽きるスピードにも似た希望が  
きみのスマホケースで居心地悪そうな顔で

挟まっている（レシートはきれいに整理しな  
くちゃダメだ）から人生はひとり用の携帯  
ゲーム端末だという人が出てくる。（後略）

といったように現代的な用語を使った散文詩だ。また「煉獄鳥」は

白よ  
淀みなくうねり燃えあがる白よ！  
その狂い立つにぎわいよ  
稲妻と焔の交わりで産み落とされたる一粒の卵の  
その玲瓏たる横顔よ  
傍聴収縮を繰り返す輪郭線よ  
（中略）  
赤面症の夜明けよ！  
くちばしの鋭さよ！  
幻よ！  
卵を破り覚束ない足取りで立つ鳥の  
慟哭とも咆哮ともつかぬ産声よ！  
（後略）

というような、漢字過多の近代詩みtainな行分け作品もある。やっぱさ、さまざまな芸風を  
試すべきよね。詩人は一つの作風に固執するタイプとさまざまなものを行うタイプに二分  
できるけど、詩人としての可能性を高めるなら断然後者でやっていったほうがいい。ことま  
だ若くてこれからも成長していく身分なら。

数ある収録作品でも私が特にグッと来たのは「映画観」。決して「映画館」の誤字ではない  
この作品も引用してみましよう。

きみの好きな映画の話をしてくれ。メジャーなやつじゃなくてマイナーなやつ。  
初めての彼氏と映画館で、十分後に上映するという理由だけで観た面白くも面  
白くなくもなかった映画でも（デヴィッド・フィンチャー作品、中村哲也作品  
以外で頼む。轟眞の監督だから）、高校時代、サブカルにハマりたてのキミが

観たアングラな映画（『ファイト・クラブ』、『パルプ・フィクション』、『バックファロー '66』はもはやサブカルでもアングラでもないよ）でも（ある程度は）なんでもいい（なんでもいいよ）。

（中略）

（と、ここまで止めどなく喋ったところで終始苦笑いを浮かべていた彼女が「映画なんてもう何年も見てないし……最後に観たのは『君の名は。』かなあ」とイケアの組み立て式本棚みたいな台詞を吐くものだから僕は心底冷めてしまっ、グラスに残ったレモンティーをずるずると音を立てて啜った後で退屈に会計を済ませカフェを出てそれから少し話して彼女とは別れた）。と、こんな映画、大学の自主制作映像作品でもあるわけではないが、つまるところ僕が求めているのは行為は無しに平気で二、三時間付き合ってくれるような気さくな女友達と、こんな、エッセイにも私小説にもなれないような散文を「詩」というかたちで発表されているから、というだけの理由でここまで真面目に「詩」として読んでくれている読者だ。（後略）

ン~~~~~……わかるっ!!! 詩中主体と作者を同一視するのはよろしくないことではあるが、「映画観」で私は元澤氏へ大いに大いに大いに大いにイッ!!!共感した。執拗なかつこはオタク特有の独白で、作品名を羅列しちゃうのもオタクの気質。でもやめられないのはそんな自分に付き合ってくれる人を探しているからだ。神聖かまってちゃんをマイナーバンドと言っていた奴に「メジャー出ている奴がマイナーかよ、せめてあぶらだこレベルからマイナーと言え!」とキレていた中学時代の自分を思い出す。

硬派な詩も、現代風なエモい詩も、そしてオタッキーな詩も、あらゆる作風を器用にこなす元澤氏はこれから詩人としての名を広めていこう。

～ ～ ～ ～ ～

そういうわけで、今回は沖縄の詩人・元澤一樹氏を採り上げました。彼は私より1歳年下なんですよね。いよいよ下からせつつかれるようになったんだと、これからより一層気を引き締めて私も精進していきます。

それじゃ、今回もありがとうございました～!